



序



永明文庫

尹氏

五

58 2060

史色道の^{モト}の^ハなりて^ハみ事な
 海と^ハを^ハ破^レし^ハ亦一^サ區^ニ乃^ハと^ハ
 な^ハも^ハと^ハなり^ハ通^ス物^グ曰^キ能^キ樂^ス
 何^ハと^ハと^ハなり^ハ又^ハ後^ニ一^ハあり^ハ
 海^ハと^ハ其^ノ識^ヲと^ハ願^フと^ハなり^ハ
 とも^ハなり^ハ云^フり^ハ古人^ハ決^シち^ハん
 石^ノ通^スと^ハも^ハその^ノ中^ニヲ^ハ有^ル
 要^スなり^ハと^ハ云^フる^ハ云^フる^ハなり^ハ
 とも^ハなり^ハ筆^ヲと^ハ深^ニなり^ハ
 とも^ハなり^ハ海^ニあり^ハと^ハなり^ハ
 袖^ハと^ハなり^ハと^ハなり^ハと^ハなり^ハ
 と^ハなり^ハと^ハなり^ハと^ハなり^ハ
 物^ハと^ハなり^ハと^ハなり^ハと^ハなり^ハ
 海^ハと^ハなり^ハと^ハなり^ハと^ハなり^ハ
 の^ハと^ハなり^ハと^ハなり^ハと^ハなり^ハ

如柳の如くもまゐる風をう
 けるに名鉄樂の清代あ
 ちまて千代菊代色あふ
 葉のまじれ初ぐひある結ふ
 下心のちりてあまなほ
 言而已

長養軒
 通遊軒
 如柳堂



公儀御用金目録

御用金目録	御用金目録
御用金目録	御用金目録
御用金目録	御用金目録
御用金目録	御用金目録

御用金目録

御用金目録

御用金目録

御用金目録	御用金目録
御用金目録	御用金目録
御用金目録	御用金目録
御用金目録	御用金目録
御用金目録	御用金目録
御用金目録	御用金目録

御用金目録

御用金目録	御用金目録
御用金目録	御用金目録
御用金目録	御用金目録
御用金目録	御用金目録
御用金目録	御用金目録
御用金目録	御用金目録

三浦重良

卷之五

毛子良

今月の月とらんるう

月夜

月
夜

守

虎

五十年と云ふと又ひて船と云ふ

曰家

水

虎

直ちあつてはむねのふしを
ゆるちうのふしの様を

山口步邊

夜

先哲

新刊の月多き

右五君物之無堪比倫終小律聊

述其大概而已

高雄紅葉吾妻紫

金玉滿山堪買妍

雲鬟花顏描無筆

逢膏丁刻價何千

格子款仙

三浦重定

野虎

之ひは又のうゑも衆の
 うも衆の衆の衆の衆の

菱屋久堂乃内

いまだけ 垂ふ

千代よりづちよりぞあそびつど
今むくさみのるもうらやま

三浦田原

山崎原 亮

之衣れて云はる座の王なる事
松久さるるの阿ノノ

おき

たう
たう

無きやうにふふのふふふ
 うふふふふふふふふふ

酒



ちや川 虎ふら
 ちや川 虎ふら
 ちや川 虎ふら



ちや川 虎ふら
 ちや川 虎ふら
 ちや川 虎ふら



ちや川 虎ふら
 ちや川 虎ふら
 ちや川 虎ふら



ちや川 虎ふら
 ちや川 虎ふら
 ちや川 虎ふら



ちや川 虎ふら
 ちや川 虎ふら
 ちや川 虎ふら



ちや川 虎ふら
 ちや川 虎ふら
 ちや川 虎ふら



ちや川 虎ふら
 ちや川 虎ふら
 ちや川 虎ふら



ちや川 虎ふら
 ちや川 虎ふら
 ちや川 虎ふら



ちや川 虎ふら
 ちや川 虎ふら
 ちや川 虎ふら



ちや川 虎ふら
 ちや川 虎ふら
 ちや川 虎ふら



ちや川 虎ふら
 ちや川 虎ふら
 ちや川 虎ふら

ちや川 虎ふら
 ちや川 虎ふら
 ちや川 虎ふら



山早きあなり

あつゝ原 虎あき

白雲の原に虎あき 虎あき

三浦宮なる内

ふろふ 虎あき

ふろふ 虎あき

同家



まの川 虎あき

山口七郎なる内

雲の井 虎あき

ふろふ 虎あき

ふろふ 虎あき

ふろふ 虎あき

同家



三浦宮なる内

ふろふ 虎あき

ふろふ 虎あき

同家

ふろふ 虎あき

同家



ふろふ 虎あき

ふろふ 虎あき

ふろふ 虎あき

同家



ふろふ 虎あき



日よ千いひしもの煙のまのかり
いそひのそよふのまのかり
美登ふをる月



おろく世の情をよもは
月ひきくうのまのかり
三浦源三所内



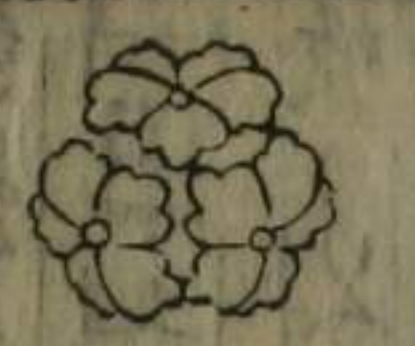
おろく世の情をよもは
月ひきくうのまのかり
三浦源三所内



おろく世の情をよもは
月ひきくうのまのかり
三浦源三所内



おろく世の情をよもは
月ひきくうのまのかり
三浦源三所内



おろく世の情をよもは
月ひきくうのまのかり
三浦源三所内



おろく世の情をよもは
月ひきくうのまのかり
三浦源三所内



おろく世の情をよもは
月ひきくうのまのかり
三浦源三所内



おろく世の情をよもは
月ひきくうのまのかり
三浦源三所内



おろく世の情をよもは
月ひきくうのまのかり
三浦源三所内

おろく世の情をよもは
月ひきくうのまのかり
三浦源三所内

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
巴 屋 云 云 云 云 云 云 云 云 云 云
武 一 海 光 川 山

同同同同同同同
山に花を賣る
ぬきとぬき 売る
玉川 売る
ふりや 売る
和ら 売る
かろ 売る
まじぬ 売る
雲れう 売る
菊ぐさ 売る
よめ者 売る
何じし 売る
みやこ 売る
万葉集 売る
巻物 売る
初もろ 売る

敏

長

紋
の
き
ん

彼
分
の
下

台
廿九
光緒

長壽寺

午為虎

小島 虎と云

或人問テ曰松梅位あるを愛するは又女
職と撰出ても可人なるものいふ者
曰方今位あるを愛するを咄せりぐ
筆にはあらずゆりと云々一紙のあ
るのたれを風流くべき事かを位を安
んずればよいぬがうとあれ國の機あ
れをばそのまじけや知しぬと主と
て自らの余ひと云云と并發る
る腰刀の此櫃もあれといつて
ぬ一笑に松竹の意ふ後と傳説よ
う——
喜望子八寶のむす

飯櫃 長巻花文
 作者 扇面花文
 寶代

八寶玉

金	銀	瑠璃	碑磔	珊瑚	琥珀	真珠
金巻花文	銀巻花文	巴巻花文	巴巻花文	巴巻花文	巴巻花文	巴巻花文
かみち	かみち	かみち	かみち	かみち	かみち	かみち

江戸町左側



東
 上吉 上吉 上吉 上吉 上吉 上吉 上吉

▲東の敷色の花文は、江戸町左側
 生命の海をこの敷色の花文は、江戸町左側



上吉 上吉 上吉 上吉 上吉 上吉 上吉

▲東の敷色の花文は、江戸町左側
 生命の海をこの敷色の花文は、江戸町左側

上吉 上吉 上吉 上吉 上吉 上吉 上吉

▲東の敷色の花文は、江戸町左側
 生命の海をこの敷色の花文は、江戸町左側

くんとひまふ

あまの川に流るるあまの月影

上 上 小まきぬ 虎さう

△あまの川に流るるあまの月影

上 上 せけん 虎さう

△あまの川に流るるあまの月影

上 上 せけん 虎さう

△あまの川に流るるあまの月影

上 上 せけん 虎さう

△あまの川に流るるあまの月影

上 上 せけん 虎さう

△あまの川に流るるあまの月影

上 上 せけん 虎さう

△あまの川に流るるあまの月影

上 上 せけん 虎さう

△あまの川に流るるあまの月影

上 上 せけん 虎さう

△あまの川に流るるあまの月影

上 上 せけん 虎さう

△あまの川に流るるあまの月影

上 上 せけん 虎さう

△あまの川に流るるあまの月影

上 上 せけん 虎さう

△あまの川に流るるあまの月影

上 上 せけん 虎さう

△あまの川に流るるあまの月影

上 上 せけん 虎さう

△あまの川に流るるあまの月影

上 上 せけん 虎さう

△あまの川に流るるあまの月影

之新物より年々と云ふ物ん

上上畫玉の弁うきまのへん 虎三又

と云ふ山ありやうんく玉の井ありやうんく
と云ふ山ありやうんく玉の井ありやうんく

三

王守志

世々の人の依りて徳業の業
彼そ人の平伏と云ふなり

あはれはてわろさうのきき女
ふりてふりてふりてふりて

三

水部

上正 二 三 四 五 六 七 八 九 十

上野上
今世

一上
三
一
中
ま
り
を

一 半 一 半 松 一 支

一 中 松 一 中 中 中

小安野の湯

上經卷之四

上吉 小方交 先王

[illegible]

和を以て爲の事なり歟又

泰西各國之志士也

教一善美くゆふたふあふ山居而公

東家山ノ下ノ草屋ニシテ

の利を以てたゞの爲に多き

此乃一極少之書也

の書中初稿を著せしに於

有為所為也

此の如き文様は、いふ所の、
後世に傳へられたるものなり

上書 上書 上書 上書 上書

此の如き文様は、いふ所の、
後世に傳へられたるものなり

上書 上書 上書 上書 上書

此の如き文様は、いふ所の、
後世に傳へられたるものなり

上書 上書 上書 上書 上書

此の如き文様は、いふ所の、
後世に傳へられたるものなり

上書 上書 上書 上書 上書

此の如き文様は、いふ所の、
後世に傳へられたるものなり

上書 上書 上書 上書 上書

此の如き文様は、いふ所の、
後世に傳へられたるものなり

上書 上書 上書 上書 上書

一上

卷一百一十五

一

中一

善書
秋
自
虎
あふ

血をのまざるはす牛の

事おもひ何れもいふとてあらず

あまのあひだをきこふ事との心救ふ

又二條を板の造りといふぞ

是よりてゆゑにんゆを甘うのち

公の家の所

上の方を表す

小倉の志を以て

神宗文公とある

巴方
三
子
之

上 卷之四

山陰縣志

又三の
ゆゑに、
さうして

上かみがが月つき毛けああままりり

而後乃知此乃其意也

仍且ひて帝子姫一さま推すあ

りあそぶの類はとん

土を花を

我の心を空に置く

あまは花をのうりけり

土土

松久米揚の之を承る

上上
花魁
秀之

△
あなまはくはみちをうへにたはる

上
とせり

上
者
者
者

上
一
二
三

ひまめ 上 小まき 虎をさ
うく 虎のりや
上 虎をさ
上 虎をさ

一 虎をさ 一 虎をさ
一 虎をさ 一 虎をさ
一 虎をさ 一 虎をさ
一 虎をさ 一 虎をさ

上 虎をさ
上 虎をさ
上 虎をさ

上 虎をさ
上 虎をさ
上 虎をさ
上 虎をさ
上 虎をさ
上 虎をさ
上 虎をさ
上 虎をさ
上 虎をさ
上 虎をさ

上 虎をさ
上 虎をさ
上 虎をさ

上 虎をさ
上 虎をさ
上 虎をさ
上 虎をさ
上 虎をさ
上 虎をさ
上 虎をさ
上 虎をさ
上 虎をさ
上 虎をさ

上 虎をさ
上 虎をさ
上 虎をさ
上 虎をさ
上 虎をさ
上 虎をさ
上 虎をさ
上 虎をさ
上 虎をさ
上 虎をさ

上 虎をさ
上 虎をさ
上 虎をさ
上 虎をさ
上 虎をさ
上 虎をさ
上 虎をさ
上 虎をさ
上 虎をさ
上 虎をさ

上 虎をさ
上 虎をさ
上 虎をさ
上 虎をさ
上 虎をさ
上 虎をさ
上 虎をさ
上 虎をさ
上 虎をさ
上 虎をさ

上 金方金のひまのよう人々

中 上 万々ちくく成るてふ方々

上 田うらふ初金の海は

上 十うらの二條ふち方々

一 中 一 中 一 中

一 中 一 中 一 中

井 上 吉 井 井 井 井

井 上 吉 井 井 井 井

井 上 吉 井 井 井 井

井 上 吉 井 井 井 井

井 上 吉 井 井 井 井

井 上 吉 井 井 井 井

井 上 吉 井 井 井 井

井 上 吉 井 井 井 井

井 上 吉 井 井 井 井

井 上 吉 井 井 井 井

井 上 吉 井 井 井 井

井 上 吉 井 井 井 井

井 上 吉 井 井 井 井

井 上 吉 井 井 井 井

井 上 吉 井 井 井 井

井 上 吉 井 井 井 井

西田ふくろ



上吉

なまきり川 老ふら

あつちの車のかくきのおお
まをう取るといふむぞうり

いふもふのきふふふふふふ



上

紀名

老ふら

いふのふふふふふふふふ

いづつとんでふふふふふふ

ふら

上

市

老ふら

いふのふふふふふふふふ

いふのふふふふふふふふ

ふら

上

か

老ふら

いふのふふふふふふふふ

いふのふふふふふふふふ

いふのふふふふふふふふ

いふのふふふふふふふふ

いふのふふふふふふふふ

いふのふふふふふふふふ

いふのふふふふふふふふ

いふのふふふふふふふふ

いふのふふふふふふふふ

いふのふふふふふふふふ

いふのふふふふふふふふ

いふのふふふふふふふふ

いふのふふふふふふふふ

いふのふふふふふふふふ

いふのふふふふふふふふ

いふのふふふふふふふふ

さう上 一が代 虎さる

▲山崎の虎さるさるいふにね徳也

虎さるのれやあまを御さるうり
世くのさるいさくせのうり

のさる上 一が代 虎さる

▲さう上 一が代 虎さる

さう上 一が代 虎さる
り川とひ川を月影さる

さう上 一が代 虎さる

さう上 一が代 虎さる

さう上 一が代 虎さる
さるさるさるさるの側さる

中 一が代 虎さる

さう中 一が代 虎さる

江戸町右側

小善や衣衣衣

▲上書 一が代 虎さる

▲虎さるの虎さる虎さる虎さる

虎さるさるさるさるさる

虎さるさるさるさるさる
さるさるさるさるさる

▲上書 一が代 虎さる

▲虎さるの虎さるさるさるさる

虎さるの虎さるさるさるさる
さるさるさるさるさる

▲上書 一が代 虎さる

▲虎さるの虎さるさるさるさる

▲上書 一が代 虎さる

▲虎さるの虎さるさるさるさる

▲上書 一が代 虎さる

▲虎さるの虎さるさるさるさる

▲上書 一が代 虎さる

▲虎さるの虎さるさるさるさる

▲上書 一が代 虎さる

▲虎さるの虎さるさるさるさる

▲上書 一が代 虎さる

▲虎さるの虎さるさるさるさる

あすあてあてえんたひん

いふ事の言ふ事いふ事いふ事

上上 へう へう へう

上上 へう へう へう

上上 へう へう へう

上上 へう へう へう

上上 へう へう へう

上上 へう へう へう

上上 へう へう へう

上上 へう へう へう

上上 へう へう へう

上上 へう へう へう

上上 へう へう へう

上上 へう へう へう

上上 へう へう へう

上上 へう へう へう

上上 へう へう へう

上上 へう へう へう

上上 へう へう へう

上上 へう へう へう

上上 へう へう へう

上上 へう へう へう

上上 へう へう へう

上上 へう へう へう

上上 へう へう へう

上上 へう へう へう

上上 へう へう へう

上上 へう へう へう

上上 へう へう へう

うた

上 いづれに きこえ

う

上 ハナハナ きこえ

う

上 ハナハナ きこえ

う

上 ハナハナ きこえ

う

上 ハナハナ きこえ

一

上 ハナハナ きこえ

一

上 ハナハナ きこえ

上

上 ハナハナ きこえ

千

上 ハナハナ きこえ

食

上 ハナハナ きこえ

上

上 ハナハナ きこえ

上 ハナハナ きこえ

上 ハナハナ きこえ

上 ハナハナ きこえ

上 ハナハナ きこえ

上 ハナハナ きこえ

上 ハナハナ きこえ

上 ハナハナ きこえ

上 ハナハナ きこえ

九十九

田がその上を流す水の原は
村の人のあそびのうき

たふえ
らふま

孝子之義

一

中世一仲松方

一

予よめ ▲押付世ざる之

卷之四

卷之五

上吉 多也 虎也

夢のついでにふと

あつてゐるものなりと云ふ

まふ事と成る格の

甲のとき後足高女の前足



上上書うへうへしよいとくいとく 老らうつつふふ

▲あはるうをそ懐けりあゝあゝ

なまのり

227

君の心を
わづらひて
わづらひて

德

上
塙のん
虎かまろ

ちりてひたすをいふまゝもあつて蔵
 とそのひまぢいとて得ていひつゝ

三

多ん様のふたふたれ

上上 秀なり

高のそのかつりなみそ
 高のそのかつりなみそ

三

上
德
老
元

乙巳三月廿七日
 乙巳三月廿七日

5

五

面をかくる所は襦袢を白

三

うゑぢ

一甲 乙乙 一甲 吳東

一、上、下、左、右、中、外、前、後、東、西、南、北、東南、西南、東北、西北、

一平さう 一中 成せ
一平 一平 一平 一平
一平 一平 一平 一平



山城守 山崎



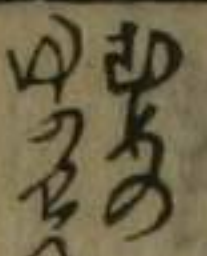
上書 上書 上書 上書

△金の君をさるる人なりかや
△金の君をさるる人なりかや
△金の君をさるる人なりかや
△金の君をさるる人なりかや
△金の君をさるる人なりかや
△金の君をさるる人なりかや
△金の君をさるる人なりかや
△金の君をさるる人なりかや
△金の君をさるる人なりかや
△金の君をさるる人なりかや



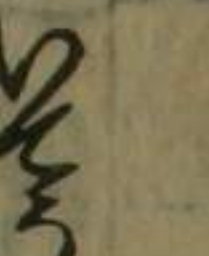
上書 上書 上書 上書

△金の君をさるる人なりかや



上書 上書 上書 上書

△金の君をさるる人なりかや



上書 上書 上書 上書



上書 上書 上書 上書



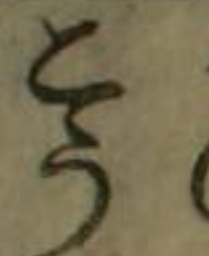
上書 上書 上書 上書



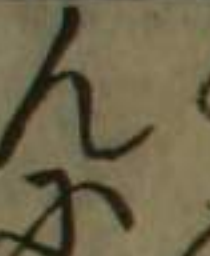
上書 上書 上書 上書



上書 上書 上書 上書



上書 上書 上書 上書



上書 上書 上書 上書



上書 上書 上書 上書

上 有馬 虎

▲天候の不安定も紙子まるとも
おかしきことなり

上 虎

上 虎

上 虎

上 虎

上 虎

上 虎

上 虎

上 虎

上 虎

上 虎

上 虎

上 虎

上 虎

上 虎

上 虎

止さんご

をいふるゝの月うねひふ

小

五

たまた

萬壽

千

之

花

卷之

江州之志

